
しにがみと。

赤坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しにがみと。

【Nコード】

N0322S

【作者名】

赤坂

【あらすじ】

死神を自称する少女と、“死神の眼”と呼ばれる異能の眼を持つ少年の学園ファンタジー。

身に降りかかるさまざまな事件を解決するために、二人は奔走する。

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションであり、作中にある一切の名詞はこの作品固有のものです。

現実世界と同じ名前のものでも内容が異なることがありますので、ご注意ください。

プロローグ

名作、と呼ばれる本にはそう呼ばれるだけの理由が存在する。

例えばそれは流れるように紡がれる美しい文体であったり、あるいは読む人間の心を抉り取るような心理描写であったり、またあるいはその情景がめまぐるしく目の前に浮かぶようなストーリーテリングかもしれない。

それはいずれにしてもその本の内容を開いて見ればわかることであり、本屋に行つてちらりと立ち読みでもすればすぐに感じることもできるものである。

では、人間はどうか。

聖人と呼ばれる人間は、本当にそう呼ばれるに足る清い人間なのだろうか。

人畜無害のような、虫も殺せないような顔をしている人間は、本当にその評判通りの人間なのだろうか。あるいは、悪事を犯した人間は、本当に救いようのない下劣な人間なのだろうか。

それは、少なくとも傍目から見ればわからないものである。幸か不幸か、人間は本のように中身を開いて見ることも見られることもないからだ。

人間に評価を下すこと。例えるならそれは、表紙だけを見て評価を下すようなものではなからうか。

だが、それが出来たならどうなるだろう。人間の根底にある善意も悪意も、それどころかその人間の歴史そのものさえ見ることが出来たなら。

それはきつと、とても恐ろしいことではないか。

人間の白と黒、本音と建て前、表と裏。

それらはすべて他人から見えるもの、見えないものであるという前提で形作られているのだから。

第一章

どこまでも、遥かに遠い、春の空。

と、通学路の真ん中で思わず一句詠んでしまふくらいの天気であった。

高校生活に入つて丸一年、ちょうど二年目に入る今日という日をこ
うも晴れ晴れとした朝で迎えることが出来たのは、俺こと向井律むかい・りつの
日頃の行いが良いからではないかと自惚れても罰は当たらないと思
うほどの晴天である。

桜の舞う路には入学したばかりであろう新入生の女の子たちが新た
な学校生活に胸を膨らませ、友人たちと和気藹々と会話を弾ませる。
その初々しい姿に思わず俺の頬も緩む。

「あら、向井。何をニヤニヤしているの。新入生の品定めかしら」
背後から、そんな矢のような言葉が飛んでくる。

俺は、どうして後ろから俺の表情が見えるのかという突っ込みを飲
み込んだ。

新入生を見ながらニヤニヤしていたかどうか。

そんな問答を行ったところで自分の首を絞めるだけである。

「おやおや、おはよう。今日も素晴らしい天気ですな、榊よ」

口から出たのは、そんな皮肉を込めつつも障りのない言葉であった。
さかき・あや
榊理。

それが振り返つた先にいる少女の名前である。もつとも、彼女の完
成された肢体は少女というよりも女性という呼称を連想させるが、
スマ・アトスマ・アトに着こなした制服が、彼女がまだ高校生であることを主張
していた。

隣に並んだ榊は流すように俺を見る。俺も彼女を見ていたものだけ
ら、しっかりと目があった。

紅玉ルビーのように紅く、燃えるような瞳は、その瞳孔に映る自分の顔が

見えるほど大きい。綺麗に整った顔立ちと高校生離れした容姿。そんな同級生が自分の隣を歩いているなんて、男としては泣いて喜びそうな状況シチュエーションである。が、しかし。

彼女についてこの一年でずいぶんと（知りたくもないことを）知った俺としては、こんな気持ちの良い朝をどうして台無しにしてくれたのであろうかとキリストとブツダの胸ぐらを掴んでを問い詰めたいい心境だった。

「何かしら、私の顔をじろじろ見て。私を視姦するなんて百年と少し早いわよ」

「そうだろうか。それは男へセックスアピールがしっかりと出来ているということだろう。年頃の娘にとっては素晴らしいことじゃないか」

「そう、殿方に女性として見られているというのはとても誇らしいことよ。相手があなたではなければね」
ぐぬぬ、と彼女の減らず口に心の中で歯噛みをする。

俺と神の間の異様な空気を察したのであろうか。前の方で会話をしていた新入生たちはこつちをちらちらと見ながら走っていった。視界の隅に、そのうちのひとりが派手にずっこけたのが映った。

神は長い黒髪を嫌みのようにたなびかせ、さも涼しげに春の路を歩いていた。

彼女が歩くだけで、舞う桜がまるで舞台の演出のように見えてしまうのだから不思議なものである。

「それで。今日はどんな用があるのだろうか」

「あら、用が無ければあなたに話掛けてはいけないの？」

「用が無ければ話掛けてこないのはそつちだろうに」
そうかしら、と呟きながら彼女は制服のポケットから小さな紙を取り出した。

その紙切れはピンク色で紙面には猫をデフォルメしたような丸っこ

い生物が描かれていた。

彼女がこういう小道具を持っていることに少々驚きつつ、それを受け取る。

折り畳まれたそれを開いて見ると、ここから比較的近い場所の住所が書き込まれていた。

「今日の十二時に此処へ。少しでも遅れてみなさいな、八つ裂きにしてあげるから」

女性を待たせるのは男としてどうかと思うが、だからといって八つ裂きにするのはさらにどうかしている。しかし、それよりもっとどうかしているのは、目の前の彼女が物理的にそれを実行するだけの力を持っていることだった。

「わかった。十二時だな」

「物分かりが早くて宜しい」

柗は軽く微笑むと歩みを早めた。

姿勢よくきびきびと歩く姿は彼女の均整のとれた四肢をさらに映えさせる。そのままファッションショーに紛れ込んでも違和感を感じさせないようなきれいな姿であった。

のんびりと歩く俺との距離が三メートルほど離れたところで、柗は一度歩みを止めて振り返り、

「ああ、契約はお早めに」

と消費者金融の宣伝のような台詞を吐くと、俺が返事のために口を開く前にさっさと行ってしまった。

その背中を見ていると、一緒に学校まで行かないのかよというやるせない気持ちと、後ろ姿も様になってるなあというさんざんコケにされながら思うにはなんとも情けない気持ち湧き上がる。

だが、俺は知っている。彼女が、今夜何をするために夜の街に赴くのか。この一年ほどの間、彼女に付き合っただけ信じられないようなものを見てきた俺は知っている。

彼女は死を司る神。即ち、死神なのだ。

第二章

世話焼きな幼なじみと図書館の女神。

それが俺の生きてきた十余年で巡り会うことのできた数少ない僥倖であつた。

何せ高校入学とともに死神を名乗る電波の進ほとほしるような女と出会つたものだから、この先の高校生活など泥を塗りたくつたように真っ暗なものだと悲観していた。

実際に二年生に上がる記念すべきこの日に俺の人生における最大の懸案事項から真夜中のデ・エトに誘われたのは事実ではある。

しかし、その僥倖のひとりである図書館の女神、御鏡水蓮女史みかがみ・すいれんと言葉を交わしているだけでそんな事実は無かつたかのように心は透き通り、今日の天気のように晴れ晴れとするのであつた。

「ごめんね、向井くん。今日は昼までの授業なのに仕事を手伝わせてしまつて」

「何を仰るのか。俺は御鏡女史の為ならば自分の時間など惜しくはありませんよ」

ありがとう、とにこやかに謝辞を述べる御鏡女史とともに、俺は図書館に備え付けられた長机の上で新入生の図書利用カードの整理をしていた。

図書館は中心の長机が並べられた読書スペースとその周囲を取り囲むように設置された本棚によって構成されており、俺と御鏡女史はその読書スペースの隅に陣取つていた。

ちなみにその近くには司書用に作られた部屋があり、御鏡女史はそこに私物を置いている。

この高校の図書館は、本を利用する際に裏の見返しに付くポケットにあるカードに自分のクラスと出席番号を記入して司書の御鏡女史が図書委員に提出せねばならない。

そのカードを自分の図書利用カードと併せて保管しておくことで自分の借りている本や返す期日がわかる仕組みになっている。

新入生は明日の学校案内で図書館の利用方法を説明される予定なので、その下準備をしているという訳だ。

「だけど、向井くんが居てくれて本当に助かったわ。ひとりじゃあ量的にも精神的にも辛いから」

「もともと俺は図書委員。手伝って当然の身分なのですよ」

「そうは言っても他の図書委員の人たちはなかなか来てくれないもの」

御鏡女史はフレームの無い眼鏡の奥の瞳を悲しげに伏せるが、それは俺にとっては喜ばしいことである。図書委員に面倒くさがりが多いお陰で、俺はこうして御鏡女史との二人きりの時間を独占できるのだから。

大学を去年卒業したらしい彼女は、今年の一月に産休を取った前の司書に変わってこの高校に赴任してきた。

その知的な雰囲気と高校生とは比べるべくもない抜群の成熟度で学校各所（教師から生徒、果ては父兄まで）にファンを持つのだが、なかなか奥ゆかしいその性格から仲の良い男性は少ないのだそうだ。

俺も最初は意思疎通に苦労をしたものの、今ではこうして自然な会話が出るまでになっている。

「そういえば向井くんは榊さんと仲が良いのね」

「失礼ですが、それはどこの榊さんを言っているのでしょうか」

「榊さんと言えば榊さんじゃない。榊理さんのことよ」

「どこでそんな事実無根で曲解の極みであるような噂を耳にしたのかは知りませんがそんな事実はありません」

「そうなの？」

「ええ、間違い無く」

御鏡女史は首を傾げるが、俺は努めて反応をしないように作業に没頭した。カードのクラス、出席番号を見て素早くケースに放り込ん

でいく。

「今の高校生事情はなかなか複雑なのね。私の頃は男の子とふたりで歩いていただけで付き合ってるんじゃないかって囃し立てられたものなのよ」

彼女は懐かしむように言った。

何を思い出しているのかはわからないが、彼女にも俺と同じ三年間の高校生活があったのだ。

容姿端麗な御鏡女史のことだから甘酸っぱい思い出も道端に転がるの石ころのようにあるのかもしれない。

「今のってそんなに歳は変わらないでしょうに」

「そう思いたいものだけどね。この前、兄の子どもにおばさんって言われたのよ」

「なんと恐れ多いことを。御鏡女史の瑞々しい肌を見たらそこらにいる女学生も裸足で逃げ出しますよ」

そんなことを言うっているうちに作業が残りわずかになっていることに気付く。俺も御鏡女史もおしゃべりに夢中になりながらも手はしっかりと動かしていたのだ。

俺は相対性理論を蹴飛ばしたい気持ちになった。

「向井くんって本当に良い人よね。お世辞とわかっていても嬉しいわ」

ほわほわとそんなことを言って御鏡女史は机を立ち、奥の司書用の部屋から何かを手にとって戻ってきた。

「はい、これ。向井くん」

それはポストカードだった。裏地にはトナカイの写真が載っており、それがどんな角度アングルから撮ったらこんな躍動感のある写真が撮れるのか全くわからないような秀逸な写真であった。表は無地だが、隅にはアルファベットに似た小難しい記号がちらちらと印字されている。

「これはこれは。素晴らしいものをありがとうございます。また海外旅行に？」

御鏡女史の趣味は海外旅行である。先日、唯一の趣味であると言っ

て照れくさそうに話してくれた。今年のバレンタインには中国に行ったお土産であるチョコレートと一緒に食べて悶絶した記憶がある。「うん、春休みに友達とね。どこだかわかる?」
「英語、いやフランス語でも無い。トナカイが載っているなら北極圏なのでしようが。申し訳ない、分かりかねます」
御鏡女史は小悪魔チックに満足そうな笑みを湛えると、
「じゃあ宿題ね。明日までに解いてくること」
そう言っただけの肩をぽんぽん叩くのであった。

*

幼なじみとは思うほど珍しいものでもないのではないかと俺は考えている。

そもそも幼なじみは何か、その定義を述べよと言われても首を捻るくらいの浅慮しかないのではあるが、幼い頃からともに遊び、学んだ程度の仲であれば幼なじみと言っても良いのではないだろうか。そしてその程度の人物であれば人間誰しもひとりくらいは思い当たる節があるのではと思う。

ただ、その人物と今でも一番仲の良い親友と言っても差し支えないような関係であるという人は少ないだろう。

何せ、歳を重ねる毎に一人で出来ることが増えて行くように、人間の交友関係も爆発的に広がっていくものである。

その中で幼なじみと呼べる人物より馬の合う人間を見つけるのは至極当然のことであろう。むしろ確率はそちらの方が高いのではないか。

そしてそれは自分と幼なじみ両方に言えることであって、お互いにより馬の合う人間とつるむようになり、やがてふたりは疎遠になる。世の幼なじみ事情とはそのようなものではないかと俺は考えるのである。

「ああ、それはそっちに置いてくれ。この書類は棚の上な」

書類が小気味よく整理された棚に囲まれた生徒会室で、そんな幼なじみの声が脚立に乗っている俺の下から響く。

今では整理されているように見えるこの部屋だが、ほんの一時間ほど前までは新入生の名簿やら、今年度の予算分配の書かれた紙やらが散乱しており、いまようやく教師諸君に見せても文句は言われないう程度にまで片付けたところである。

ふと、そういえば俺は未だにこいつとつるんでいるな、と眼下の幼なじみを思う。

結局のところ、俺は俺の考える幼なじみ論の確率の低い方を引いた稀有な例であるのだろう。

「ごく自然に俺をこき使っているお前に敬意を表する次第だ」
書類の整理を終えて脚立を降りながら悪態を吐く。その対象は、遠近感を狂わせたような女生徒である。身長は百四十もあるだろうか遊園地に行ったら係員のお兄さんから、背が足りないからもう少し大人になってからまたおいで、などと乗車拒否されてしまう遊具があるのではと思うほどの小ささである。

よくもまあそのサイズの制服があったものだ。SやらSSやらを通り越してDSとかそういうサイズではないかと意味も無く勘ぐってしまう。

「何を言う。生徒会長であるこの私、七ヶ瀬^{なながせ・さつき}皐月に下僕のように使われると言うのはそこの生徒が夢にまで見るような光栄なことなのだぞ。向井も胸を張るがいいさ」

「そうだな、張る胸もない七ヶ瀬に変わって俺が胸を張っておこう。あいたたた」

ぽかぽかと可愛らしい擬音が付きそうな猫パンチを腹で受け止めつつ、生徒会室の時を刻む唯一の時計に目を向ける。

子どもに大人気の黄色いくまさんが蜂蜜を顔面に塗りたくっている様子が描かれたその時計は長針が十二、短針が二を指していた。

「さて、さっちゃんや」

「どっした、りっちゃん」

何故だかほくほく顔の七ヶ瀬を腋からひょいと持ち上げ、部屋の大部分を占める大きな机の椅子のひとつに座らせる。

彼女の目の前には彼女自身の鞆があり、その中にはふたつのお弁当が入っているはずであった。

「そろそろお腹を叩くのを止めてお弁当を貰えないだろうか。かれこれ三時間ほど作業を続けているせいか胸と背中がくっつきそうだ。あ、今のはお前の悪口じゃあないぞ。あいた」

七ヶ瀬の隣に腰掛けた俺は彼女が座ったまま繰り出してくるけたぐりを甘んじて受けつつ、彼女から弁当を受け取る。

青の大きなハンカチで包まれたそれを開くと、生姜焼きときんぴらごぼつに揚げ豆腐、おまけにミニトマトと豪華な品々が狭いよと悲鳴を挙げそうなほどぎゅうぎゅうと詰められていた。

「どうだ、美味しそうだろう。私お手製の弁当が食べられるなんてこの学校でお前だけなんだ。しつかりと味わえよ」

七ヶ瀬は俺より一回り小さな弁当を開きながらそう言った。いただきます、とふたりで手を合わせると、時間差で生徒会室に香しい香りが充満する。それに急かされるように生姜焼きを一口含んだ。

「美味しい」

「そうだろう、ゆっくり食えよ。うん、美味しい。やっぱり私の料理の腕は天下を狙えるレベルだな」

そんな自画自賛を右から左に受け流しながら、箸を進める。

あと、十時間。いまから地球の自転が半周する前に俺は非日常に足を突っ込むことになる。

血と死と化け物が大手を振って闊歩する世界。何故俺がそんな世界に身を投じなければならぬかと聞けば、神は運命だからと言った。つくづく電波である。

だが一方でそんな非日常を迎合している俺がいた。理由はと問われれば、俺はきつとこう答えるだろう。

余りに幸せすぎるこの日常が、極めて得難く特別なものと実感さ

せてくれるから、と。

「愚かなる者は思う事多し、だな」

俺が箸を止めてぼんやりとしていると、七ヶ瀬は藪から棒にそんなことを言った。

「なんだそれは」

「松尾芭蕉の言葉だよ。昔からお前は根詰めることが多い」

昔から、と彼女は言った。俺に対してそんなことを言えるのは七ヶ瀬だけでは無かろうか。

「ここ長い間、お前が何か悩んでいるのには気付いている。これでもお前の幼なじみを長くやっているからな。いつまでもくよくよしっているようだから口を挟ませてもらうが、男なら一度がつんと行動を起こしてみる。それで駄目でも私が後ろで支えてやるさ」

「そんな小さな体でか」

「無論だ」

七ヶ瀬はきんぴらごぼろを頬張りつつ、そんなことを言った。その頬にはご飯粒がくっついており、彼女が咀嚼するのに合わせて上下に運動していた。

まったく有り難い話ではないか。

俺の同輩で、一年生で生徒会長に登りつめた才媛にして無二の幼なじみ。

そんな彼女が全力で俺を支えてやると言う。そんなことを言われたらやるしかないではないか。この極めて得難く、特別な日常に戻って来るために、今日もまた最低の非日常を乗り切る。

その程度が出来なくて、何が男か。

「ありがとう、七ヶ瀬。おかげで踏ん切りがつきそうだ。お前が幼なじみで良かったよ」

「それは私も同じだ。礼には及ばない」

そう言つて七ヶ瀬は頬にご飯粒を携えたまま、目を細め、薄く笑うのだった。

*

こここのところ、若者たちの話題をさらう出来事がふたつある。ひとつは隣の高校の女生徒が妊娠、女生徒はその相手を探しており、それが俺の通う高校の男子生徒、という噂である。

この手の噂によくある通り、伝言ゲームのように聞く話聞く話に尾鱈が付きまわっており、その相手は他の女も妊娠させて墮胎させたのだ、渦中の女生徒とだれそれが一緒に歩いているところを見たのだと誰も彼も好き勝手言い合っている次第である。そもそもやることをやる前に相手の素性くらい知っておけと思うのであるが、そんなことを思うのも無駄な時間だといくら俺には興味を持ってない話題であった。

そしてもうひとつが、この街で起きている連続猟奇殺人である。三月の末から一週間ほどの間に三件、立て続けに殺人事件が発生した。

被害者はいずれも深夜、ひとりであるところを襲われており目撃者もないため警察の捜査は難航。

自治体からは夜は外へ出歩かないようにと外出禁止令まで飛び出した。もつともそれを破ったところで何の罰則もない注意報程度のものだが。

犯人の殺害方法はある意味単純明快だった。

人知を超えた力による人体破壊。

これだけでも俺としては嫌な予感とそれに伴う汗が止まらないというのに、さらに悪いことに被害者の体からは犯人のものとと思われる唾液が検出されている。つまり、喰っているのである。

このあまりに狂気じみた事件は朝晩のニュース番組から昼間のワイドショーまで、全国のお茶の間を震撼させている、らしい。

「恐らく十中八九、人間の仕業ではないでしょうね」

と、興味も無さそうに呟くのは、隣で学生服のまま深夜の街を練り歩く榊理であった。

比較的都会と言ってもいいこの街は、深夜も光が消えることはない。事実、現在俺と榊が歩く場所はいかがわしい名前のネオンサインが宙を舞う、街の裏通りであった。

左右にはキャッチのお兄さんとその誘惑に耳を傾ける酔っ払いたちが働き蟻のようにぞろぞろと群れをなしているが、それらが俺たちにまで来ることはない。榊が小範囲の人払いをしているかららしいが、それが何なのかは俺は知らない。榊が制服姿でこんなところにも補導されないのもそのためである。

俺は動きやすく、汚れても構わない激安ブランドのジャージとパーカーを羽織っている。

そのポケットに入れた護身用のスタンガンを手のひらで弄びながら、口を開いた。

ちなみに、服装について待ち合わせの時間より早く来ていたらしい榊に鼻で笑われたのは、俺と榊の足元にいた野良犬だけの秘密である。

「じゃあ化け物が人を喰い殺しているのか」

「可能性は高いわね。もつとも頭のネジがダース単位で吹き飛んだ狂人の仕業、というのも大穴としてはあるけれど」

やはり、彼女の口調は興味なさげなものであった。しかし、裏腹にそのルビーのように紅い瞳は爛々と輝かせている。そこから読み取れるのは、明確なくらいの殺意とそれを興じる歪んだ心境である。どちらが狂っているのか、と俺は心の中で吐き捨てた。

「どちらにしても社会不適合の屑なのだから、やることはさして変わらないわ。見敵必殺。search and destroyよ」

「それでいいのかお前は」

「どういう意味かしら」

そこで初めて、榊は眉を顰めて表情をかえた。その絵画のように完成された表情から放たれた言葉に、何故か俺が抱いた感情は僅かな恐怖だった。

「榊は死神だろう。ならば人が死ぬことは喜ぶべきことではないか。

それを止めるようなことをどうして行う」

榊は芝居がかつたため息を吐き、やれやれといった具合に口を開いた。

「そうね。確かに死神は死を司るもの。一部の邪教以外ではほとんどの場合忌み嫌われてきたわ」

そう言つて、彼女は右手を空に突き出した。その手を握り締めると、音もなく人の身長ほどもあるつかという大きな鎌が現れた。刃の長さだけでも人の上半身くらいはある。

俺は驚いて小さく悲鳴をあげるが、周囲の人間はそんな様子に気付くこともなく、俺たちふたりに道を譲るかのように通り過ぎていく。彼女は俺の反応に満足したように笑つと、鎌を霧散させた。

「そして私たちの役割も死神の名の通り、定められた死を生きとし生けるものすべてへ平等に与えること、だったのだけど」
榊は続けながら、肩を竦めた。

「人間の生活が時代とともに変わっていったように、私たちを取り巻く環境や求められるものも次第に変わっていった。人間の長寿命化や戦争行為の減少、小規模化なんかがその最たるものね。定められた死そのものが長い間隔スパンを伴うものになってしまった」

「つまり」

「死神という存在の必要性ニースそのものが少なくなってしまったのよ。だからこそ、今の私は幽霊掃除ゴーストスイーパー紛いのことを仕事にしているの。まあ、私が掃除しているのは幽霊ではなく化け物だし、すべての死神がそういう訳じゃないけどね。今でも発展途上の国なんかを中心に、死を運ぶことを生業にする死神は多いわ」

がん、と頭を叩かれたような衝撃だった。
この国では、就職氷河期ならぬ死神氷河期の波が彼女を襲っていたのである。

俺の彼女に対する感情は、忌諱や嫌悪から一気に不憫に傾いていった。

「なんと云うか。世知辛い世の中になつたものだな、同情するよ」

「全く、同情するなら仕事が欲しいものだわ」

そんな死神との会話とは思えない所帯じみた話をしている途中、不意に榊が立ち止まった。隣にいた俺は二、三步進んだところで立ち止まり、訝しげに体を向ける。

「どうした」

「喜ばないな、仕事よ」

彼女と美しい顔が歡喜と興奮で歪んだ。

「さっそく使つて貰いましょうか。あなたの、死神の眼を」

*

それに気が付いたのは、自我が生まれてすぐのことであった。

一緒に遊ぶ子ども達の頭の上に奇妙な記号の羅列が見えたのである。日本語でも英語でもない、おおよそこの世のものとも思えないそれが、まさにその通りだと知ったのは後の話である。

目に見えたそれをそのまま模写して物知りな年寄り連中に見せても気味悪がるばかりで芳しい反応は無く、両親はその奇々怪々な文字を書く我が子を精神病院に連れて行くほどであった。

やがて俺は年寄り連中ですら読めなかったその文字が次第に読めるようになっていった。

それは、人の歴史であった。

生まれた日から、今日この日まで。あの日に何を食べ、その日に何を行い、そして今、何を思っているのか。そんな情報が頭になだれ込んできたのだ。

そして、その最後には決まって数字が並んでいた。

俺はすぐにそれが日付なのだと気付き、もっともそれが近いある少女をじつと観察していた。ある時は一緒に遊びながら、またある時は一緒に勉強をしながら。

今から約十年前のその日。俺の目の前だとある少女が命を落とした。

「どうしたの」

すぐ目の前にある榊の顔に焦点が合った。

長い睫に紅い眼、よく通っているが長すぎない鼻筋と少し尖った薄い唇。すべてが絶妙な平衡の上で綱渡りのように間隔を保っており、だからこそ美しいのだと近くから見るとよくわかる。

俺は覗き込む彼女から顔を離し、照れ隠しともとれるように片手で髪を梳きあげた。

「いや、榊の美しい顔に見惚れていたのだよ。他意はない」

「そう。それはいいから早くして頂戴」

世辞を軽く受け流した榊はうずうずしたように言った。まるで爆発寸前の風船のようだ。情報という刺激を与えればすぐに飛び出して行くのだろう。

「眼を持たない私は死を感じることはできるけれどそれがどこで行われたのかわかることは出来ないの。これ以上の犠牲者を出さない為には急ぐことが肝要なのよ」

「死を感じたということは既に四人目の犠牲者は出たのだろう」

止められなかったのか、という言葉を言外に含ませる。

「人間が何人死んだところで私には関係ないけれど、五人目を出さないに越したことはないでしょう」

事も無げに言う彼女の頬をはり倒したくなった。

この感情は彼女に向けるべきものではないと分かってはいる。しかし、人の命を省みない言動には腹が立った。人の命を省みないという点では人を喰い殺す化け物と同じではないか。

深呼吸をして心を落ち着かせる。よく考えてみる。もしこの猟奇殺人が化け物の仕業だったとして、それに対抗し得る存在は榊だけだ。そして、化け物を見つけることが出来るのは少なくともこの場では俺だけなのである。

頭の隅に、ちらりと何かが映る。それは、今も小さな少女の笑顔ともうひとつ。今は見ることに出来ない少女の、笑顔と最期。

目を閉じて、眉間に力を込める。慣れてきたのか、一年前ほど集中

力は必要ない。眼圧で頭が押されるような錯覚を受ける。歯を食いしばり、目を開けた。

「あ」

あの部長まじうぜー、死ねよ。二課の小泉って油だらけで気持ち悪いよねー。あー吐きそう。さっさとホテル行かせるよ金も持たねえ豚野郎が触るなうわこんなところで吐くなよ邪魔くせえ死に晒せ屑どもが消えるよ視界に映るなカスが息巻いてんなよここから消える消える消える消える消える消える。

「あああ、あああああ！」

頭がずきずきと痛む。情報の奔流が脳髄を駆け抜けた。それ以上にここにいる人間のすべてが俺に対して悪意を向けているような、そんな錯覚に陥った。

いや、それは錯覚ではないかもしれない。人の思考を勝手に覗き見ることは、それほどに許し難いことなのではないか。

「しっかりとしなさい、向井！」

榊に肩を揺すられ、正気に戻った。彼女の必死な顔を初めてみた気がする。いつも飄々としている彼女がどうしてそんな顔をしているのか。情報焼けした頭ではるくに考えることも出来ない。

「そのの、裏路地」

何とか絞り出した言葉がそれだった。情報の波から髪の毛を箸で摘むように見つけた手掛かり。榊の言うところの、死が見えた場所。それを、榊に伝えようと必死に言葉を紡ぐ。

「何ですって？」

「左側の、裏路地だ。ここから五百メートルも無いくらい。かなり近い」

「わかったわ！」

榊が駆け出す。人払いが消えたのか、周囲の人間がしゃがみ込む俺を何事かとじろじろと見ていた。

酔っ払いだとも思ったのであろうか。大丈夫かと声を掛けられた。肩に触れられた。吐き気がした。

俺は息を整え、榊を追って走り出した。

ここから一刻も早く離れたかった。この悪意の塊のようなところから。少なくとも、こんなところの人間の善意など信じることは出来なかった。

路地裏に入る。場所は頭に残っている。万全ではないが、走れば一分と掛かるまい。それほど近い場所であった。

薄暗く狭い、人ひとりがやっと通れるような路地の角を曲がる。すぐに榊の背中が見えた。こちらを振り返りもしない彼女がいつも通りで、何だか嬉しいような、悲しいような感情が湧く。こんな場面で顔がにやけるのがわかった。

「榊！」

「向井」

暗がりでは表情は見えないが、呼び掛けに振り向いた彼女がすぐに足元に視線を落としたのはわかった。つられて、視線を向ける。

「え？」

そこにあるものを見たと同時に必死に堪えていた吐き気が限界を迎え、胃液が食道を逆流する苦々しい感触がポロツカの如く咽喉を遡るのがわかった。

何となく、嫌な予感を感じた。人知を超えた力による人体破壊。検出された唾液。今まで散々自分に言い聞かせてきたというのに、まだ俺は平和ボケから抜け出せていなかったのである。

そこにあっただのは、少し前まで人間だったものの残骸だった。

第三章

今から一年前ほど前になるであろうか。

昨日登校中にすれ違った女生徒たちのように入学式を終えたばかりの俺は、まだ見ぬ高校生活に人並み以上に胸を膨らませていた。

中学生から高校生。名前が変わったところで中身が変わるわけではないのだが、何故かその時は一足飛びに大人になった気がしたのである。

友達はたくさん出来るだろうか、あわよくば見た目麗しい女生徒と交際なんかもしてみたいものだ、などと夢は広がるばかりであった。今となってみれば、全くもって道化^{ビエロ}もいいところである。

とらぬ狸の皮算用という言葉があるが、それでも生ぬるいくらいに俺の期待はずたずたに斬り裂かれることも知らずに、それこそ苮を抜いたショートケーキのような面^{つら}で俺はこれから通うことになる学校を探検していたのである。

一通り教室を回り、次は特別教室でも見て回ろうかと考えていたときであった。

あなただったのね。

凜、と。後ろから聞こえたのは、空気すら姿勢を正すような澄んだ綺麗な声であった。

はて、誰であろうかと首を傾げる。自慢ではないが、俺は小学生時代から此の方七ヶ瀬以外の女生徒と口を聞いたことがない。声の相手が知り合いであろうはずがなかった。

俺は振り返る。それが本当の意味で地獄への片道切符だとは露とも知らずにである。

彼女の姿を初めて見たときの衝撃を今でも覚えている。例えるなら、

モーゼの海割りを見たへブライの民のような心境であった。クレオパトラも泣きながら逃げ出すような美貌。傾国の美女とは、この人のことを指すのだろう。こんな奇跡があり得るのか。いや、許されるのか、と。

いやはや、今考えてみれば大英帝国の腹黒紳士どもの三枚舌によって騙された旧植民地もかくやあらん、と言った具合ではあるのだが、少なくともその次の彼女の台詞を聞くまでは本気で彼女、榊理のことを運命の人とすら思い込んでいたのである。時を遡れるのなら、俺はその時の自分を十二分な助走を付けた上でぶん殴ってやりたい。そんなこんなで舞い上がっていた俺は、彼女が矢継ぎ早に紡ぐ言葉に二つ返事どころか一つ返事くらいの勢いで頷いていたのである。しかしよくよく思い出して見れば、その時点で彼女の言動は電波どころか電磁波で電磁砲トルガンが撃てるくらいぶっ飛んでいた。

私は死神。あなたはその眼を継ぐもの。私の化け物退治に付き合いなさい。そうすればあなたの望むものをひとつだけ与えてあげる。要約すればこんなところであろうか。

なんとまあ、と言った感じである。今時残念な中二病患者でさえもうちよつと現実的な設定を考え付くものだろう。しかし、舞い上がった俺は、彼女のことを運命の人からちよつとおかしな俺の嫁にランクダウンするくらいにはあれれおかしなと感じながらも、彼女とその夜会う約束をしたのだ。

そして、七ヶ瀬の忠告も聞かずにほいほい付いていったのが運の尽きである。

その後は権力ではなく物理的な力によるブラック企業も真つ青なパワハラによって、昨日の晩のようなこととまではいかずとも（流石に人間の死体を見たことはない）、似たようなことを延々と繰り返してきた。

それでも、最初は俺の質問にもしつかりと答えてくれたりしていたのである。

例えば俺が気紛れに、どうして死神なのに死神の眼を持っていない

のか、と尋ねたときは、今まであまり変えなかった表情を少しだけ影のあるものに変えて、

父も使えなかったから、そういうものなのよ。そう、私は思っているわ。

と、悲しそうに（いま思えばそれきりそんな表情は見たことがない）教えてくれた。

その表情がまた俺の趣味嗜好をアッパーカットのように的確に決めるものだったのだから、愚か極まりないことである。

ところが、そんな時代は長くは続かず。

俺が眼を長いこと使っていないことを知ると、聞いていないだの前例がないだのと騒ぎ始め、拳げ句よくわからない魔術だとかいうもので無理矢理死神の眼を使わせようとしたところで俺はようやく知った。

俺の幼なじみは正しく物事を判断していたことと、目の前の女は美人なだけのろくでなしだと言ったことを、である。

しかし先ほど言った通り、事後返却もできない片道切符を掴まされたものだから、俺はそのままずると彼女の化け物退治に付き合わされ、現在に至っている。

しかし、もしかしたら。

俺が今現在、榊のことをこうまで嫌っているのは、彼女の第一印象が余りにも衝撃的だったからかもしれない。

もちろん、彼女の言動やその他もろもろが俺の愛すべき日常を破壊しかねない、というか破壊する元凶そのものであるという点で気に障っているのは間違いないのであるが、一度持ち上げられた分の落差はナイアガラもびつくりするくらいとてつもないものになっているのである。

そう考えると、俺も彼女に対して勝手に期待をした分くらいは親切にした方がいいのではないかと、ほんの少しだけ、猫の額くらいに

は思つのであつた。

*

榊と夜のお出掛けを行った翌日の目覚めは、俺の人生においてワースト3に入るくらいに悪かつた。

もともと体力と精神力をチヨークを紙ヤスリで削いでいくようにがりがり消耗する眼の使用に加えて、何ら比喩表現もなく臍物をぶちまけた元・人間の物体を見てしまったこと、さらには吐いたことによる咽喉焼けの耐え難い痛み。そしてそれに伴う吐き気。

頭痛は除夜の鐘のようにがんがんと止む気配はなく、まるで頭の中身を電動破碎機^{シェイカー}でかき回してそのまま無理矢理押し込められたかのようなそんな心地である。

朝のニュースを見たららしい学友たちが、新たに起きた猟奇殺人の話題を口にする度にあれを思い出すのもかなりの負担であつた。

朝学校に行く前に吐き、昼ご飯を食べてから吐き、放課後授業が終わってから吐いた俺は、オキシドールのつんとする臭いが苦手な保健室ではなく、心のオアシスである図書館で机に突っ伏していた。

隣では何事かと様子を見に来た御鏡女史が背中をさすりながら声を掛けてくれているが、グロッキーを通り越しかけた俺は、あー、とか、うー、などというお前は旧石器時代の人類かと言われそうなほど単純な言葉しか発せないでいた。

「本当に大丈夫？ 昨日の晩お酒でも飲んだのかしら」

「そーゆう訳じゃないのですが。あー、そこきもちいいです」

「え、そう？ ここかしら」

あーうー言いながら突っ伏した体勢で頭だけ持ち上げて図書館を見渡す。

相変わらず、放課後の図書館に生徒は俺しかいない。そんな中で御鏡女史に背中をさすってもらっているのだから、俺はとんでもない幸せ者ではないかと思ひ始めた。

彼女は気付いていないかも知れないが、さするのに夢中になるあまり、時々艶めかしい豊満な感触がぶよぶよんと背中当たっているのである。

「どう？大丈夫？」

「ええ、まるで夢を見ているようです」

「良かった。もっと頑張るね」

何を頑張るのか、いやむしろナニを頑張ってくれ、といった支離滅裂な思考を力技で頭の隅に追いやり、俺は昨晚のあの後のことを思い出していた。

と言っても、体力的にも精神的にも極限まで追い詰められた俺は、昨晚、あの後のことをほとんど覚えていない。ただ、榊がやたらと冷静に状況判断を行っていたのは覚えている。

しかしわざわざ眼を使った甲斐もなく、わかったのは一連の猟奇殺人がほぼ間違いなく人間の仕業ではないことだけだった。

ちなみに、一応野生動物の可能性を指摘してみたら、熊なら出来るかもしれないらしいが、畜生に人の目を避けるほどの知性があるはずもなく、あまりに現実味がないこのことで自分のことは棚にあげた榊に一笑、そして一蹴された。

俺から言わせれば、一番現実味がないのは彼女の存在そのものである。

とにかく、結局詳しいことは榊が持ち帰った犠牲者の一部（どの部分かは聞かなかった）を調べてからしかわからないそうである。

どこでどう調べるのかは知らないし検討もつかないが、どうやら彼女にはそういった化け物を専門にして研究する機関に知り合いがいるらしい。やっていることは警察でいうと鑑識課とかそういうところに近いであろうか。どうであれ、深入りする気はさらさらないのであるが。

かれこれ一時間ほど突っ伏していたのと御鏡女史を構成する様々なもののおかげで、随分と気分が良くなった頃であった。

「あら」

図書館に来訪者が現れたらしい。がらがらと引き戸を開ける音と、御鏡女史の間の抜けた声。ずいぶんと近くでそれが聞こえたが、気のせいであろう。そう思わねばいろいと持て余す。

かなり密着していた御鏡女史は少し距離を開けて、さする手を止めた。

「こんにちは、榊さん」

「向井、ちよつと来なさい」

御鏡女史の挨拶を気にも止めず、榊は机に突っ伏した俺の襟を後ろから掴んでずると廊下へ引いていった。咽喉をきゅつと絞められた俺は、潰れたカエルのような悲鳴をあげて為す術なく引きずられる。

「み、御鏡女史……」

「ええと、うん。向井くん、ご愁傷様」

眼鏡の奥に申し訳無さそうな苦笑いを湛えて手を振る御鏡女史に見送られ、俺は図書館を後にした。

*

榊が俺の襟を離れたのは、図書館を遠く離れた二年生の教室が並ぶ廊下のちょうど中央あたりの階段前であった。

放課後、ずいぶん時間が経っている為か既に生徒の姿は無く、首が解放されて空気を求める俺がげほごほとむせかえる音だけが響く。

「まったく。もう少し優しくエスコートしてもらいたいな」

「じゃあそれをされるに足る人格を身に付けることね」

夕日を背にする榊はほとんど見下すような顔でそう言った。腰まで伸びた黒髪が照らされて小川のせせらぎのように光を放っている。

これほどの扱いを受けてもなおその姿に見惚れているのだから、男というはつくづく残念な生き物である。

「何かわかったのか」

「ええ。一連の殺人は狼人間、人狼の仕業と考えて間違いはないで

しょうね」

狼人間。

榊の口から出たその怪物の名前は誰でも知っているであろう非常に一般的なものだった。俺もその名だけは知っているが、それ以上のことは知らなかった。

「満月の夜にけむくじやらの狼になって人を襲うとかいうあれか」それは後世の創作だけど、と榊は付け加えた。

事実、事件は月の満ち欠けに関係なく起こっている。吸血鬼の十字架やんにくに代表されるような、人間が後付けした弱点や設定など化け物には関係ないと言ふことなのだろう。

さらに、それならば目撃者がいないという現状や殺害方法にも説明が付く、と榊は続ける。

「もともと北欧神話のベルセルク、バーサーカーと同一視されているのだから、力で人間をばらばらにするのは容易いでしょうね。唾液が検出されたのも人狼なら頷ける。それにいくら狂戦士と言つても神話級の化け物ならば人払いくらいは心得ているだろうし。ただ、解せないのは」

説明について行けず、頭からひつきりなしにクエスチョンマークを浮かべる俺を尻目に、榊は指を顎に当てる。

「北欧神話由来の化け物がどうやってこの日本にやってきたのか、ね。日本にも似たようなのに狗神がいるけれど、腐つても八百万の一柱である狗神なら死体を晒すようなへまはやらないでしょう。ま、どちらにしても私の敵ではない。後はそれがどこにいるのかなのだけど」

そこで榊は俺に目を向けた。

「眼を使え、と」

「あら、ずいぶん物わかりがいいじゃない。少し前までは二日続けたは無理だとかなんとか言っていたのに」
事実だった。

ただ一度の使用ですら多大な負荷を強いるそれは、正直に言って多

用すれば自分の身体、それ以上に精神が持つ保証は無かった。

だが。

「榊」

「何かしら」

榊の表情は変わらない。

俺は自身を奮い立たせるように大きな手振りをしながら口を開いた。
「俺はな、ようやく決意したのだよ。犬も食わないようなくそつたれな非日常をとっと終わらせて、俺の愛すべき日常に戻るとな。そのためならば、どのような苦痛も耐えてみせるさ」

昨晚の出来事で、嫌と言うほど思い知らされた。

俺の愛すべき日常が、忌むべき非日常に侵食されない保障などここにもない、と。人の残骸が塵芥のように転がる世界に、俺の大切な人たちを巻き込むわけにはいかない、と。

いや、むしろ今までそう考えなかったことがおかしいのだ。

言いながら、榊の顔が徐々に歪んで行くのがわかった。それは昨晚のような狂気ではなく、面白い動きをする生き物を見つけたような純粋な興味、そして同時にそれでどうやって遊んでやろうかと思案する幼子のような残虐性を秘めたもののように感じられた。

それらに気がつかないように、俺は続けた。

「前にお前は眼の使用を躊躇する俺に言ったな。協力するのなら、ひとつだけ望みを叶えてやる、と。お前が言うところの契約だよ」
榊がぴくりと眉を動かした。契約、という言葉に興味をもった証拠だ。

俺はそれを確認すると、一気に畳み掛けた。

「俺とともに在るすべての人間の日常を、忌むべき非日常から守り抜け。それを間違いなく約束するのなら、俺はお前に何時^{いつ}如何なるときも協力しよう」

それは、メフィストフェレスに魂を売り渡すファウストの行為に等しかった。

善を為す悪魔と絶対の探求者。

不完全な死神と力無き愚者。

些か役者は見劣りするが、いまはそれで十分であった。少なくとも、俺の願いを実現するだけの力が目の前の死神にはあるのだから。

「へえ」

神は目を細めて相槌を打った。そのまま、興味深そうに俺を観察していた。舐め回すような視線に、すべてを見透かされているような気にすらなる。

これでは、どちらが異能の眼を持っているのかわからないなと心の中で苦笑していたときに、ようやく神は口を開いた。

「宜しい。まあ、及第点としてあげましょうか」

途端に、全身の力が抜けるのがわかった。自分でも気がつかない内に全身が緊張していたようだ。握り締めていた手の平は汗でいっぱいだった。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、神は今まで見たこともないような喜色の笑顔を浮かべて言った。

「契約内容としては聞いたことがないけれど、あなたが私に協力する限り守ってあげましょう。あなたの愛すべき日常、というものを無論、契約を破ったときは分かっているでしょうね」

「その時は八つ裂きにしてくれても、この眼をくり貫いてくれても構わんよ」

素晴らしい、と神は頷いた。

「では、早速やってみましょうか。これまでは私の願いに強制力は無かったけれど、これからはお互い^{イブン}に対等の関係なのだから、その辺りも理解しているでしょうね」

「ああ、分かっているさ」

いままでの俺と神の関係が対等なものだったかどうかはこの際置いておくとする。こうして手を取りあった以上、最優先すべきは化物の駆除である。

俺は瞳を閉じ、一度深呼吸をした。

「死神の眼は見る対象によって見え方が異なるわ。神話級の化け物

がいるのなら、間違いなくその集団の中に雑音ノイズが入るはず。それを探すだけなら眼の有効範囲はいくらでも伸ばせるから、少し試してみなさい。これからは眼の応用的な使い方も知ってもらうつもりだから」

「詳しいな」

「母が眼の持ち主だったから」

「なるほど」

彼女の話に適当な相槌を打ちながら、眼を開く。近くに人がいない為か、昨日ほどの負荷は掛からなかった。

榊に言われた通り、有効範囲を百メートルほど広げたところで、違和感を感じた。

「な」

茫然と、意識してもいない声が出た。

こんなはずはない、と自分に言い聞かせるが、死神の眼はそれが事実であることを曲げなかった。

俺が驚いた理由は、何のことはない。反応反応が近すぎたのだ。

すぐに見つかったのは自身への負担軽減という意味で喜ぶべきことではあるのだが、その距離は直線距離で百メートルほど。あまりに近すぎる。

昨晚、眼を使用したときでさえ五百メートル先まで有効範囲を広げていた。だから、今回はキロ単位での搜索になると思っていた。

しかしあまりに近い。これでは近すぎて

「どうしたの？」

「校内だ」

「え？」

高校の敷地内どころの騒ぎではない。その反応ノイズは校舎の中から発生していた。

「しかもこれは」

怪訝な顔をした榊と顔を見合わせる。

不思議なことに、死神の眼を使っても彼女の情報れきしが俺の頭に入

つてくることは無い。

恐らくはそれが彼女が人であり得ないことを示しているであろうが、俺の頭はまったく別のことで警鐘を鳴らしていた。

この距離、この方角は。

「図書館じゃないか」

それは、つい先ほどまで俺がいたところであった。

混乱と多量の情報でろくに回らない頭をぐるぐると回転させる。しかし、どう思考をもがかせても頭に浮かぶのは最悪の想像だった。

さつき、俺は誰と一緒だった。俺の背中をさすってくれた人は誰だった。恐らく胃液の酸っぱい臭いを振りまいていると言つのに、身を寄せて言葉を掛けてくれた人は誰であったのか。

思うより前に駆け出していた。しかし、榊に腕を掴まれて止められる。

「離せ！」

声を荒げる。自分でも驚くくらい攻撃的な声だった。

しかし、榊は俺の言葉に込めた感情を意に介さず、この細い腕のどこから出しているのかわからないような強い力で、腕を離さない。

「落ち着きなさい。あなたは情報担当でしょう。それならばそれに徹しなさいな。あなたが立ち向かったところで事件の犠牲者がひとり増えるだけよ」

「……」

俺は思い切り歯を食いしばり、体を止めた。

「図書館に反応があった。さつきまで俺と御鏡女史がいたところだ。

このままじゃ御鏡女史が危ない。これで十分だろう手を離せ！」

「いいえ、お断りね」

「っ！」

ぱん、という音がふたりしかいない廊下に響いた。俺の頬を榊が平手で叩いた音だった。本気ではないだろうが、頭が大きく揺さぶられる。一拍おいて、頬が熱くなった。

榊は深く息を吐いてから、口を開いた。

「落ち着いたかしら。今、あなたがやるべきことは三つ。その情報が本当に正しいのかの確認、司書がまだ眼に映っているかの確認、そしてそれを私に正確に伝えること。それ以外は私の邪魔にしかない。身の程を弁えなさい。あなたが無駄死にすると私としても非常に困るし、あなたの死によってあなたの言う日常が壊れてしまう人もいるでしょう」

「……目の前で人の生き死にが掛かっているのに、よくもまあそう冷静でいられるものだ」

「我を失ってその人間を助けることが出来るならばそうするけどね」
俺は頬に走るぴりぴりとした痛みで急激に冷めた頭を整理しながら、
榊を睨み付けた。

睨み付けながら、俺の役割を反芻する。

まず、違和感の確認。間違いなく、ある。ここから少し離れた図書館内に、ただの人では有り得ない反応が。

そして次に、そこから御鏡女史の反応を探す。広域化しているとは言っても、そこ一点に集中すれば人の名前を引き上げる（サルベージ）ことができるくらいには記憶を覗くことはできる。御鏡女史の記憶を覗き見る罪悪感を抱えながらも、緊急時と割り切って捜していく。

御鏡水蓮の名はすぐに見つかった。

その場所は違和感の中心。

狼人間という化け物が、今まさにいる場所だった。

「嘘だ」

体の芯が、震えた。視界がぐらぐらと揺れて現実感が湧かない。

まるで夢の中に放り込まれたような気分だった。しかし、先ほど榊に平手打ちを受けた頬の痛みがここが現実だと嫌味のように主張している。

「御鏡女史が狼人間だって？そんな馬鹿な話があるか。あの人はいつだって俺に優しくして」

「向井、これは何かしら。さっきあなたを止めたときに落ちたよう

「ただ」

俺が言い終わる前に言葉を遮った榊が手にしていたのは、御鏡女史から貰ったポストカードだった。躍動感溢れるトナカイが彼女の指の先でひらひらと踊っている。

「それは俺が御鏡女史から貰った」

「北極圏に住むトナカイ、そしてスウェーデン語。間違いなく北極地域からのものでしょうね。あの人は海外旅行が趣味だったかしら」
「まさか」

榊はポストカードを俺の手に押し付けながら言った。

「恐らくだけど、旅行先から憑いてきたのよ。神話級の化け物が人間に取り憑くなんて、よほど彼女の体が気に入ったのでしょうね。」

そして一緒に日本にやって来たまでは良いけれど、北欧神話に対する信仰心も捧げ物もない環境に腹を空かせて人を襲った、ということころかしら」

化け物の世界規模化もよし悪しね、とふざけたことを抜かす榊に腹も立たないほど俺は茫然としていた。

これが事実ならば、この一連の猟奇殺人も御鏡女史の犯行ということになる。

つまり、彼女は人を殺した。あの惨たらしい肉の塊オブジェを造ったのも彼女。

化け物に憑かれていたとはいえ、だ。

「さて、どうするの？」

榊は俺の顔を覗き込む。

俺は何が何だかさっぱり解らなかった。

今日一日であまりに多くの情報にあてられすぎた。昨日からの疲労もあるのだろう。飽和した情報の中で、何が必要で何がそうでないかの取捨選択ができないのである。

相変わらずぐるぐると空回る頭にあったのは、ただひとつだけだった。

一度、深呼吸した。それだけで頭がすっきり、とはいかなかったが

楽にはなつた。

「御鏡女史を助ける。彼女も俺の日常の一部、守るべき対象だ。憑かれていゝなら引き剥がせばいいだろう。わざわざ契約をしたんだ。方法がないとは言わせない」

俺の言葉に榊は超然とした笑みを向けた。

「死ぬかもしれないわよ、あなた」

「まだ死ぬつもりはさらさらない」

即答だった。

そこには如何なる異論も挟ませない。俺の意志の現れであった。

「そう」

榊は左腕に巻いた腕時計に視線を落とした。時計は小さな時計盤を持つ女性用のもので、赤い皮のベルトが彼女の白い肌に巻き付いていた。

「五時半か。微妙なところね。向井、今から一時間ほど、司書を抑えておくことができる？」

「抑えるというと」

こちらは眼が特別製なだけの男子高校生だ。素手で人間を挽き肉にするような化け物の相手はできない。

それは榊も百も承知だろう。

そこで敢えて抑える、という単語を使ったのには何かしらの訳があるのは明白であった。

「彼女の監視しておくのよ。彼女が今まで犯行に及んだのは夜だから、日没くらいまでは正気を保っていると思う。確証は無いから危険は犯したくないのだけど。どうせあなたのことだから、これ以上の犠牲者を出したくないと言い出すのでしょうか？」

「当たり前だ」

俺は頷く。これ以上他人が犠牲になって自分だけ日常に戻るなど、目覚めが悪すぎる。

「ならば、彼女が狼人間に変化した時の保険を掛けておかなければならない」

「つまり俺という餌を目の前に置いておくのか」

「物わかりがよくて助かるわ。私はあなたが司書を抑えている間に化け物を引き剥がす用意をして来なくてはならない。それまで一時間、あなたは誰の助けも借りずに化け物の相手をしなければいけない。それができるかしら」

今から、日没まで約一時間。その間、俺は御鏡女史と図書館でふたりきりと言っわけだ。

なんだ、いつものことではないか。

「聞くまでもない。榊が来るまでの間、しっかりとエスコートするさ」

榊は宜しい、と頷くと廊下の窓に手を掛けた。どうやら飛び降りる気らしい。ここは三階だが、この程度の高さなど榊にとってはあつてないようなものだろう。

彼女が窓枠に脚を掛ける。すらりと長い柔肌が、スカートから覗いた。

「向井」

そこで榊は一度俺を振り返る。そして、至極真面目な顔でこう言った。

「死んででもみなさいな。私が殺すわよ」

第四章

俺と榊が昨晚のようにふたりで街を練り歩くのは、そう多くあることではない。

彼女の仕事とやらはほぼ完全な歩合制で化け物を駆除する度に報酬が入るらしいのだが、その額は聞いた中でもっとも少ない金額でも六桁を数え、普通に生活するだけならば月に二、三回でも仕事を行えば十分な金額が懐に転がり込んでくるのだそうだ。

労働基準法という有って無いような条件下で身を粉にして働く世の労働者達サラリーマンが聞いたら袖を噛んで悔しがるとな労働条件だが、その内容は榊の死神としての圧倒的な能力があるからこそ行えるものであり、少なくとも俺のようなほぼ一般人が行えるようなものではないのも確かである。

ならば、その中でも狼人間という危険極まりない化け物の相手を、なぜ俺は買って出たのであろうか。

その理由はふたつある。

ひとつは、言うまでもなく御鏡女史の身がかかっているからである。もし榊にすべてを任せたら、彼女ごと化け物を八つ裂きにして事の解決を図るだろう。

榊は化け物との命の奪い合いに快楽を覚えている節がある。

しかし、あまりに比我の力の差がありすぎる為か、その様子はまるで非力な虫や小動物の命を弄ぶ子どものように、俺が彼女を嫌悪する大きな要因になっている。

あとひとつの理由は、榊が本当に俺との契約を守るか確かめるためである。

正直、利用価値のある俺はともかく、それ以外の人間を榊が助けるのかは怪しい。

そもそもの言動が、それが電波では無く現実のことなのだと理解し

た今になっても信用ならないのだから、緊急時などどうなるのかはわからないのだ。

しかし、榊は今、御鏡女史を助ける為に行動してくれている。

お互いに対等な関係ならば、俺も榊のその行動に報いるように努力をせねばなるまい。

そう決意して、俺は図書館の扉を開けたのであった。

*

図書館に戻ってきた俺を、御鏡女史は体調は大丈夫か、榊に酷いことはされなかったか、とそんなことを心配しながらごく自然な様子で迎え入れた。

あまりに普段と変わらないものだから、一度眼を発動して本当に化け物が憑いているのか確かめたくらいである。

そこに見えたのは先ほどよりもさらに強い違和感と、まるで墨を無造作にぶちまけたようになった彼女の人生の歴史であった。さらにもはや読めるところの方が少ないその最後には、どんな人間にもあるはずの数字の列が並んでいない。

これも、化け物が憑いた弊害なのだろう。

俺は御鏡女史に表面上の変化が無いことを確認すると、彼女に案内を頼んで図書館の中の神話関係の本が多数置かれている一角へ赴いた。

そこは場所からもあまり利用者が多くないのであるうことが伺える窓側の隅であった。しかし、本棚は綺麗に整えられており埃一つも認められないところに、御鏡女史の本に対する深い愛情が伺えた。北欧神話に対する信仰心も捧げ物も無い環境にいるから、狼人間は人を襲った。

ここに来たのは、そんなことを榊が言っていたのを思い出したからである。

少しでも神話についての知識を持っておけば、化け物が大人しくし

てくれるかもしれない。そんな思惑があった。

「神話に興味を持つなんて珍しいね」

場所への案内を頼んだ御鏡女史は不思議そうに言った。

彼女との付き合いは四ヶ月ほどだが、その間神話のしの字も言ったことの無い俺が突然そんなことを頼んだものだから、面食らったのであろう。

ここで俺が、こんなことを頼むのはあなたを化け物から救う為ですよ、と言ったらどうなるかと想像してみたが、そんなことを言ったら今まで彼女との間に築き上げてきたものが波に流される浜辺に作った砂のお城の如く、儂く壊れるだろうと言っ結果しか想像出来なかったので実際に言うのは止めておいた。

「知りませんでしたか。俺は神話も嗜む浪漫主義者ロマンチストなのですよ」

大層大袈裟に言う俺に、御鏡女史は微笑んだ。

「そうなんだ。私も詳しく読んだことはないから読んでみようかな。知ってることがあれば旅行に行ったときにもっと楽しめるかもしれない」

「是非ともそうしてください。さあ、ふたりで浪漫吹き荒れる神話の世界へ足を踏み入れようではありませんか」

御鏡女史は、気分の方はもう良くなっみたいだね、と眼鏡の奥の瞳を細めながらいくつかの本を取っていった。

「ああ、御鏡女史、図書館の閉館時間は過ぎていますが、大丈夫でしょうか」

司書用の部屋へ戻って行くのであろう御鏡女史へ後ろから声をかけた。

窓から外を見れば、太陽はその体を地平線近くまで落としている。日没までにはまだ少しあるが、図書館の閉館時間は確か五時半だったはずである。俺が戻ってきたときには既にその時間は過ぎていたが、図書館は開いていた。

「うん、大丈夫だよ。年度始めで少し仕事が溜まっているから、今日中に終わらせたくて。それが終わるまでは開けておくからね」

「なんと、そんな状況で俺の背中をさすってくれていたのですか。ありがとうございます、御鏡女史。あなたの慈悲深さの前ではかのマザー・テレサも平伏してしまうことでしょう」
大袈裟だよ、と照れたように笑う御鏡女史の背中を見送って、ヨーロッパの民俗伝説と北欧神話関連の書籍を数冊抜き取る。

榊はベルセルク、バーサーカーなどと言っていただろうか。すぐに見つかるの良いが。

そんなことを思いつつ、ぱらぱらと捲る頁ページに目を向けながら、読者スペースに設けられた長机に向かっているときだった。

どさり、という何かが落ちた音が聞こえた。何かとそちらへ目を向ける。

そこには先ほど司書用の部屋へ戻ったはずの御鏡女史が立ち尽くしていた。こちらには背を向けており、表情は見えない。足元には、先ほど彼女が本棚から取った本が散らばっている。

突然、ぴりぴりと空気が張り詰めた。それは、今までに何度か経験した、榊が言うところの大物の化け物と対峙したときに感じたものとよく似ていた。

嫌な予感がした。

窓を見る。外では赤い夕日が街を照らしている。まだ日没には時間がある。にもかかわらず、俺はその嫌な予感に従って手に持った本を隅に置き、腰を低く落とした。

彼女が日没まで正気を保っている保証はない。

榊が言っていたことが脳裏を掠めた。

「どうしました、御鏡女史」

俺の身構えながら発する声に反応する代わりに、彼女はふらふらと左右に揺れ始めた。まるで、体の中で重心が右に左に不安定に移動しているような、そんな不自然な揺れ方だった。彼女に何かが起こっているのはほぼ間違いない。

榊は自分が戻ってくる前に御鏡女史が狼人間に変化したらとにかく学校中を逃げ回れと言っていた。

少しでも時間と距離を稼ぎながら自分が戻って来るのを待て、と。無論、俺もそのつもりであった。しかし、俺は見てしまった。窓の外で楽しげに笑う、部活動をしていると思われる生徒たちの姿を。視界に明滅するのは、昨晚見た名も知らぬ人間の残骸だった。壮絶を極めるであろう鬼ごっこの中で、この学校の誰かがああならないと誰が断言できるだろうか。

俺は近くの椅子を持ち上げた。それを肩に担ぎ上げるように構える。「くふ、くふふふふ」

それは、平時の御鏡女史からは想像できないような生ぬるく、どろどろとした声だった。

俺は反射的に担いだ椅子を彼女に向けて投げつけていた。そして投げつけた後、後悔する。

もし、御鏡女史が化け物に変化してなかったとしたら。そのまま振り返って、騙せたかな、といったもの少し無理をした小悪魔チックな表情で笑いかけてきたとしたら。

しかし、既に時遅く。

放たれた木製の椅子は、回転し綺麗な放物線を描きながら一直線に御鏡女史へ向かって言った。

「御鏡女史、避けてくれ！」

俺の今日何度目かの咆哮は、何かが爆発したような音でかき消された。

その破片のひとつが自分の服に当たったことで、ようやく俺は目の前で何が起きたのか理解した。

それは、椅子が爆発した音だった。

御鏡女史はすぐ後ろまで迫った椅子に対して、振り返りもせず右手を振り上げた。まるで、羽虫を振り払うかのような仕草だった。ところが、振り上げられたその右手は凄まじい速度だった。

それと椅子が触れ合った瞬間、椅子は進路を変えることもせずそのままその構造を破壊され、ばらばらと無残に木片を飛び散らせながら爆散した。

豆腐に凄まじい速さで鉄球をぶつければ、ああなるのだろうか。想像もつかない。

しかしはつきりしているのは、鉄球に例えられたのは御鏡女史の右手であり、俺の体は豆腐に例えられた木製の椅子より遙かに柔らかいことである。

じりじりと距離を取る。そこでようやく、御鏡女史が振り向いた。

「飛んで火にいる夏の虫って奴かあ？死神と一緒にいりゃ俺も手は出せなかったのに、わざわざ美味そうな奴がこのこ戻ってくるなんてなあ。久々に見つけた丈夫な容れ物がこんなチンケなところにやって来た時にはいいよいよ俺も落ちぶれたと思ったが、ツキはまだ俺を見捨てちゃあいないようだな」

それは、御鏡女史だった。顔も体も声さえも、御鏡女史のそれだった。

しかし、醜悪に歪んだ表情も、スーツの下からまがまがしく膨れ上がった肉体も、雑音ノイズが混じったような濁声も、俺の記憶にはないものだった。

「誰だ貴様は。御鏡女史の体から出ていけ！」

叫ぶ俺を、駄々をこねる赤子を見るようにその化け物は見下ろした。「あーあー、悪いが会話を楽しむ気はねえんだよ。俺も割と余裕はないんでな。どの道スイッチを入れれば俺は正気を失っちまうし。多分痛みは一瞬だから安心しろよ。じゃあ、頂きます」

ふつり、と。電池の切れた人形のように化け物は体を前のめりにした。

そしてすぐにゆらりと体を起こす。

口の端から、人の小指ほどもあるつかという犬歯が煌めいた。

「っ！」

そのとき、俺が体を右に傾けたのは全くの偶然だった。

化け物が踏み込む体勢を取ったから、反射的に体を捻っただけだった。

仮に左に体を捻っていたなら、化け物による肉の塊オブリエはもうひとつ増

えていただろう。

その瞬間、今の今まで俺の左半身があつた胸の部分を、空気が斬り裂いた。

いや、それは空気ではなかった。踏み込みだけで床がカーペットの下のコンクリートごと抉れるほどに加速を付けた、化け物の体そのものだった。

「っ、があああ！」

その衝撃波だけで俺は体ごと吹き飛ばされ、近くの本棚に叩きつけられて、そのまま床へ倒れ込んだ。衝撃で棚から落ちた本が頭に降りかかる。

同時に、重機で壁に穴が開けたかのような衝撃音が図書館に響いた。直接本棚とぶつかった右肩から、聞いたこともない鈍い音と激しい痛みが走った。外れたか、折れたか、砕けたか。俺には判断しかなかった。

歯が砕けそうなほど、奥歯を噛み締める。そして、化け物へと目を向ける。

「ううううううッ！」

その唸り声とともに、巻き上げられた粉塵から化け物が姿を現す。

そこには、先ほど見られた理性的なものは微塵も感じられない。まさに狂戦士バサカーそのものであった。

「ふ、はは」

アドレナリン

脳内麻薬が無ければ発狂しそうな痛みを放つ右肩を逆の手で押さえながら、俺はもはや笑みを漏らしていた。

俺は勘違いをしていた。

俺が今まで見ていたのは、榊がまるで赤子の手を捻るように化け物を薙ぎ倒す様であった。

だから、心のどこかで勘違いをしていたのだ。

プロ野球選手が百五十キロのボールを易々と打ち返すのを見て、少年が自分にもできるかもしれない、と勘違いをしてしまうように。

あるいはフィギュアスケート選手の美しいジャンプを見て、少女が

自分にもできるかもしれない、と勘違いしてしまうように。

死神が圧倒的な力で化け物を薙ぎ倒す様を見て、俺は自分にもできるかもしれない、と勘違いをしていたのだ。

化け物とは、俺でも手に負える程度のものだ、と。

他人の心配などして自分の選択肢を狭めたのがいい証拠だった。

化け物はゆっくりと近付いてきた。

必死で体を動かそうとするが、体は言うことを聞かない。動かそうとする度に、骨や神経が悲鳴をあげた。

目の前まで来た化け物が、俺の顔を覗き込むようにしゃがみ込んだ。化け物が、微かに微笑んだ気がした。

御鏡女史の顔だった。

その次の瞬間には、化け物は骨格が変わっているのかと言うくらい口を大きく開いた。

赤黒い口内に、白い尖った歯が都心のビル群のように規則正しく、しかし所狭しと並んでいる。

俺は目を閉じた。

心の中で、約束を守れそうもないことを七ヶ瀬に、助けられなかったことを御鏡女史に、契約を破ってしまうことを榊に謝罪をしなから。

「っー！」

俺が目を開けたのは、痛みではなく、生暖かい液体の感触が顔に広がったからであった。

俺は開いた目を疑った。化け物は、間違いなく開けた口を閉じて、人の肌を食いついていた。

俺が噛みつかれる直前に化け物の顔の前に差し出されたであろう、榊の右手に。

「榊、お前」

「あら、おはよう向井。お目覚めには少し刺激的な絵面だったかしら」

榊は食いつかれた右手を気にも止めないように人を馬鹿にしたよう

な笑みを湛えた。

「お前、その右手！」

大丈夫か、と続けようとしたところで、肉と骨が引きちぎれる形勢がたい音が鼓膜を震わせた。

目の前で、痛みに耐えるように握り締められていた榊の綺麗な右手が、その持ち主の体から切り離された。

「くうっ！」

榊は微かに顔を歪ませる。

行き場を失った血が吹き出る手首を、左手で押さえつける。

化け物はそれをさぞ美味そうに咀嚼した。顎を上下に動かす度に、骨が噛み砕かれる音が耳に入る。

「なんとか間に合ったみたいね」

榊は額に脂汗を滲ませながら、呟くように言った。

「間に合ったってお前！」

右手は大丈夫なのか、用意は滞りなく済んだのか、今からどのような方法を使って化け物を引き剥がすのか。

聞きたいことはたくさんあったが、言葉にはならない。

それを纏めきる前に榊は再び口を開いた。

「あなた、怪我は？」

「右肩を少し、ってそれより右手は大丈夫か、用意は万全か、今からどうやって！」

「まずは落ち着きなさいな。見てみなさい」

榊がくいと顎で示す方向に目を向ける。

そこには、つい先ほどまで榊の右手を咀嚼していた化け物がいた。

しかし、その様子がおかしい。顔を歪ませ、体を捻らせ、口からは低い唸り声をあげている。

まるで、苦しんでいるかのように。

「どういうことだ」

目まぐるしい状況の変化についていけない俺に、榊はさぞつまらなそうに言った。

「あなたが寝ている間にすべて終わったと言うことよ。私が化け物にただで右手をくれてやる訳がないでしょう」

そう言つて榊は手首から先のない右腕をぶんぶんと振った。

信じがたいことだが、あれほどの傷だったというのに血は既に止まっている。

「苦労したのは、人体に影響を与えないようにかつ人狼に効くように成分を調整することだけだったわ。後は口に突っ込むなり何なりすれば良かったのだけど、右手に握っていたらわざわざ自分から飲み込んでくれるとはね」

言葉を紡ぎながら、榊は悶える化け物に近付いていく。

そして化け物の一メートルほど前で立ち止まり、茶目っ気たっぷりの、しかし、完全に化け物を見下した笑顔で笑いかけた。

「トリカブト、英名 オオカミコロシ wolfbane のお味は如何かしら、身の程知らずな子犬ちゃん？」

化け物は苦しみながら、必死に榊へと手を伸ばした。

その苦悶の表情からは、何とか一矢報いようと最後の抵抗を試みているような感じがした。

しかし、榊はその見下した笑顔を崩しもしなかった。

化け物の手は榊に届くことは無く、そのまま崩れ落ちた。

「お帰りなさい」

榊は倒れ込んだ御鏡女史を受け止めて支えると、そう呟いた。

終章

俺は新年度が始まって初めての休日を、白いシーツのたなびく病院の屋上で、その縁ふちの手すりに体重を預けながらぼんやりと過ごしていた。

春の朗らかな陽気は味気ない入院服を突き抜けて、俺の体の隅々まで染み込んでいるようですらある。

昨日、もつとも深い怪我をしていた自分の右腕に目を落とす。

右肩は脱臼していただけだったようで、あの後すぐに榊が戻してくれた。あの時の痛みがこの一連の事件の中でももっとも大きかった気がするが、きつと気のせいであろう。

すう、と息を吸い込んだ。病院の陰気くさい臭においを吸い続けていたからであろうか。肺が蒸留水で濯がれたようにすすきりとする俺と御鏡女史は、あれから一晩だけ検査入院することになった。ぼろぼろになった図書館の後処理ごまかしや病院の手配は榊がやってくれた。なんだかんだでできる女である。

俺は右肩を医者に見てもらい（脱臼に対する完璧な処置だと絶賛されていた）細かい検査をした後は、疲れていたのかすぐに眠ってしまった。

幸いだったことは、次の日が休日で新年度早々学校を欠席しないで済んだことであろうか。

一方の御鏡女史はあれだけ暴れまわったにも関わらず、驚いたことに俺よりも遥かに外傷が少なかった。

しかし、事件に関する記憶の一切を覚えていないようだった。とうより、スウエーデンから帰国してからこっちの記憶さえ曖昧になっているようである。

彼女とは先ほど病室で話をしてきたが、ずいぶんと血色は良さそう
で健康状態に問題は無さそうだった。

胸にぽっかり穴が空いたような感じがするから抱き締めて、と恥ず

かしそうに懇願されたときはいろいろなところが爆発しそうになったが、ぎりぎりのところで生徒代表でお見舞いに来た七ヶ瀬が入ってきてくれたため、何とか耐えることができた。やはり持つべきものは頼れる幼なじみである。

これで今回の一連の連続猟奇殺人事件は解決を見ることになるだろう。世間的には迷宮入りするのであるが、これ以上事件が起こることは無い。

被害者やその遺族のことを考えればこの結果が一番良い結果だ、とは胸を張って言えないところもあるが、説明のしようがない以上、俺には時間が心の痛みを風化させてくれるのを祈るしかないのである。

「あら、事件が解決したと言つのに浮かない顔をしているわね」

「そうやっていきなり人の背後に現れるのは止めて貰いたいものだ」突然背後から現れた榊は、それは失礼、とまったく反省の色を見せないぶつきらぼうな口調で謝罪しながら、俺の隣で手すりに背を預ける。

昨日喰いちぎられた右手は、今ではすっかり元に戻っている。

この女も違いなく化け物であった。

俺はそんな榊をぼんやりと眺める。

彼女は今日も学生服を着ており、それが腰まで伸びた黒髪と一緒にひらひらとたなびいていた。白いシーツの海とのコントラストが、彼女の存在を殊更に幻想的なものにしてている。

まるで、彼女の周りの空間そのものが美術館に飾られた一枚の絵のようだった。

「このような事件は、天災のようなものなのよ」

突然、榊はそんなことを言った。

手すりにもたれかかって下界を見下ろす俺に対して、手すりに背を預ける彼女は天を見上げている。

ときどき、その長い髪が顔にぺしぺし当たってくしゃみをしそうになる。

「天災か」

「そう、天災。例えるなら、あの司書の身に起こったことは、地震のときに被災者が逃げ惑う階段でドミノ倒しに巻き込まれて、自分だけ助かったようなもの。ほんの偶然で巻き込まれて、ほんの偶然で他人を巻き込んで、ほんの偶然で生き残った。それだけのことなの」

そうは言っても、俺は割り切れないのである。

いくら化け物に操られていたとは言え、四人もの人を肉塊に変えたのも、俺を殺しかけたのも、目の前で榊の手を喰いちぎったのも間違いなく御鏡女史なのだ。

だがしかし。

病室で元気そうにする彼女を見たときに安心したのも、はにかむ彼女を見て心がときめいたのも、また事実であつた。

結局、俺は彼女の罪を糾弾する術も覚悟も、その権利も持ち合わせていないのだ。

「俺は」

ぼつりと小さな言葉が出た。

恐らく榊には聞こえているであろうが、榊は振り向くようなことはしなかった。

「俺は日常が守りたかつた。出来ることなら非日常に侵されてしまつ前に。しかしその決断はあまりにも遅すぎた。榊が俺に契約を持ちかけて、もう一年も過ぎているのだからな。だからこう考えてしまつのだよ。御鏡女史にこんなことをさせてしまったのは、俺の決断が遅かつたせいではないかと。俺がもっと早く榊と契約をしていれば、こんなことにはならなかつたのではないかと」

実際にこの事件が起こるより前の段階で死神の眼を使って定期的に周囲の異変を見つけていれば、防ぐことも可能だつたらうし、そうでなくともここまで犠牲者は出なかつたはずだ。

俺が非日常に脚を突っ込むのを躊躇していたのは、至極単純で自分勝手な理由である。

ただ、ぬるま湯のような日常しあわせに頭から浸かっていたかった。
それだけの理由なのだ。

「そうね、遅すぎたわ」

ばっさりと、榊は切り捨てた。

まるで俺の中の甘えを見透かしたかのように、容赦なく。
けれど、と彼女は付け加える。

「けれど覆水が盆に帰らないように、過ぎ去った時間を元に戻すことは出来ない。ならば、あなたができることは彼女がその罪に向き合わざるを得ない状況に陥ったときに、その一切を知る人間として彼女を支えてあげること、そしてこれ以上彼女のような存在を作らないように最善の努力を行うことではないかしら」

「その程度しか出来ないのだろうか」

「珍しく物わかりが悪いわね。それが出来るのが、人間なのよ」

榊は感情の籠もらない口調でそう言った。その表情はまるで母親に置いて行かれた子どものもので、どこか寂しげであった。

屋上に一陣の風が吹く。

それに押されるように、榊は手すりから体を離れた。

「ま、これから先はあなたが契約に従っている限りにおいて、この私があなたとその日常を保証してあげるから安心なさい。私の命を賭けてでも、ね」

その言葉を聞いて、俺は彼女を少しでも疑ったことを恥ずかしく思った。

こうして一連の事件を一緒に体験して、俺はようやく理解したのだ。彼女は俺が思うよりずっとずっと思慮深く、それ以上に義理に厚い性格なのだ。

「次の化け物は今回の鬱屈ストレスを晴らせるようなのだといいわね」

それ以外に大小の問題はあるとしても、だ。
そんな彼女の性格を知ったからであろうか。

こんな事を言ってみる気になったのは。

「おい、榊」

俺は屋上から立ち去ろうとする榊を呼び止めた。

彼女は怪訝な顔をしながらも、こちらを振り返る。相変わらず、憎たらしいくらい絵になる顔だった。

「お前も俺の愛すべき日常の一部なんだ。命を賭けてくれる結構だが、勝手に死んでくれるなよ」

その瞬間の榊の顔を、おそらく俺は一生忘れない。

それは俺が今まで見た彼女の表情の中で、一番みっともなく、一番人間臭くて、一番可愛らしい顔だった。

そんな表情を今までしたことがなかったのだろう。彼女はすぐに顔を背けて、屋上から飛び降りてしまった。

飛び降りが榊の私的流行マイブームなのだろうか、とどうでも良いことを考えていると、奥の階段から屋上へ上がるための扉が勢いよく開け放たれた。

そこから休日にも関わらず学生服姿の小さな幼なじみが、俺の日常の象徴が、姿を現す。

彼女、七ヶ瀬は俺の姿を視界に認めると、こちらへと向かってきた。「なんだ向井、こんなところにいたのか。御鏡先生の見舞いについてお前を迎えに来たんだった。服も持ってきたから、早く着替えて帰ろうじゃないか。なにせ昨日図書館で原因不明の爆発があったな、その対応に教師も生徒会もてんでこまいで、ってひゃあ!? 何故いきなり抱き締める! しかもニヤニヤして! 気持ちが悪いぞ!」

俺はにやけた顔を自覚しながら、わざわざ自分からいじられにやってきた愛すべき日常を噛み締めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322s/>

しにがみと。

2011年10月9日22時59分発行